

# ポエムの窓

解説・高安ミツ子



A window of a poem

## 弟よ

くろこようこ

冬の浜辺で

砂に埋もれた貝殻をみつめる

淡いピンクのにぶい光りは

潮風にのり

水平線のかなたへと波うつ

海のある町で育った

一八〇センチを超える身の丈

その魂は幼い頃の

ひ弱なほどの繊細さを内在しながら

生きる足場の半径を

闊達にひろげ

とうとう空の果てまでいつてしまった

平均寿命まで

まだまだ届かないというのに

人気のない冬の浜辺は

ざわめきの絶えない都会の

雑踏に似ている

どちらも肌を乾燥させる

あなたは

雑踏の中に生きて大きくなり

今、その魂は

浜辺に浮遊している

どちらもあなたの好きな場所

弟よ

海のある町のふるさと

あなたがいなくなって久しいが

今もあなたの匂いで満ちている

冬の浜辺は

ひとりの男の人生を

あぶりだしの絵のように

水平線のかなたに描き出し

淡いピンクの貝殻は

彼がひとしれず残した一粒の

無念の涙となって

私の中に在る

詩集（ようこ つれづれ）より

兄弟を慈しむ日本文学の作品は数々あります。古くは日露戦争に召集された弟への思いを歌った歌人と謝野晶子の詩作品「君死にたまふことなかれ」や弟をやさしく見守る姉の姿を描いた幸田文の小説「おとうと」そして詩人宮沢賢治の理解者であった妹の死を深く悲しむ詩作品「永訣の朝」等があります。そこには弟や妹へよせる肉親への深い愛情が表現されていて、その情感は時代を越えて読み継がれています。

今回紹介する作品も弟さんへの哀惜を表現しながら、その思い出を大切に受けとめ、更に純化させた作品となっています。

作者の「くろこようこ」氏は岩手県出身で現在千葉市に在住されています。しやる詩人で、また洋画家としても活躍されています。

故郷の海辺で拾ったピンクの貝殻が作者を弟との思い出に繋げてゆきます。二連では、繊細だった弟の生き方に思いをはせる姉の優しい心情と早世した弟への口惜しさが伺えます。人気のない浜辺と人の多い雑踏とは対極的に感じられますが、実はどちらにも孤独感という共通項が内在していることに気付かされます。それらの孤独な場所こそ繊細であった弟の心が安寧に感じる場所であったことも作者は知っているのです。故郷の浜辺で、作者は弟の姿をそして気配を心にとどめようとしています。浜辺に立つ作者を包む海

風は弟の懐かしい匂いのようにすら思えるのでしょうか。終連は一枚の絵画を想像させます。冬の海辺の寒さは哀しみを連れて一人の弟の人生を色彩豊かに描いた絵になって水平線の向こうに広がります。その風景を永久に心に焼きつけようとする作者の深い愛情が伝わってきます。浜辺で拾ったピンクの貝殻は、弟の無念の涙であり、作者にとって弟の思い出を守る一つの証でもあります。作者の愛情あふれた回想は、自然に触れることにより、時を越えて哀しくも美しさが感じられます。

少し話は変わりますが、現在はインターネットの普及で多くの情報が発信され、伝達や検索の早さは正しく新時代の賜物でしょう。反面、多くの情報が氾濫する中で、注意しなければ、情報選択に迷いが生じ、その判断力さえも混乱することがあります。自分なりの心の曖昧さを払拭し、理解度を深めるためにも、ときには、自然に触れながら、あるいは、時代の中で人々が、心の曇（ひだ）を表現してきた文学や絵画等を通して、自らの感情を再認識することが大切なことに思えます。

今回の詩作品「弟」はそのことを気付かせてくれる作品であると思うのです。揺るぎない弟への情愛に心が動かされます。そして、私達も、このような心象風景の世界を常に持てるようになりたいと静かに感じるのである。

